特別支援教育の扉 №203　　令和８年10月16日発行

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」



特別支援教育統括コーディネーター　加賀谷　勝

「経験則にとらわれない」

経験がその人をつくり出すので、学習された結果としてできあがった「自分なりの考え（こうあるべき）」を簡単に変えることは難しいものです。「勝手な思い込み」や「強烈な勘違い」で子どもを指導していないか、いつも自分自身を振り返る必要があります。

ルールを指導する場面において、ＡとＢの２つの両極端な指導方法があり、どちらかしか選べない状況に置かれたとする。

Ａ：ルールを守っている子どもに着目し、その行動を奨励する

Ｂ：ルールから逸脱する子どもに着目し、その行動を叱る

参考文献「発達に特性のある子どもの学校生活の支援」藤野　博 編著　金子書房

Ａの方法

特定の子どもに向けられた言葉掛けであり、学級全体にはあまり伝わらない。ルールを守ることの大切さが浸透するまで時間がかかる。教師にとっても効果はすぐに感じられない。しかし、子どもたちは、教師が自分たちのポジティブな部分に着目していることを察すると、行動を「前向きモード」にシフトさせていく。Ａの方法でできあがった学級は、周囲と比較するとにぎやかで活気がある。

Ｂの方法

特定の子どもに向けられた言葉掛けかもしれないが、学級全体に対して「ルールを守らないとこうなる」という見せしめの意味合いが含まれる。そのため、即効性が高い。叱られていない子どもたちも言うことをよく聞くようになる。「叱られたくない」と感じる子どもほど、鳴りを潜めるように過ごすため一見静かな学級ができあがる。ネガティブな気持ちを植え付けると、子どもたちの行動は「後ろ向きモード」にシフトし、子ども同士が相互に監視し合うような教室内にピリピリとした雰囲気が醸し出されていく。

「ちゃんとしなきゃ」「ちゃんとさせなきゃ」という気持ちが過剰になると、それが正義となり、呪いに化けます。誰もが失敗を恐れることなく、前向きに挑戦できることが肯定される雰囲気を作るためには、「こうあるべき」という呪いから解き放たれる必要があります。

子どもの育ちには想定外がつきものです。「そうきたか！」という驚き、「なるほど、やるな！」という発見こそが、授業を授業らしく、学校を学校らしくします。子どものハプニングに対して、「まあ、そういうこともあるよね」と全てを包み込める人になりましょう。

教職の魅力は、「子どもは自分の思い通りにならない」と感じる経験を積み上げながら、子どもの成長や頑張っている姿を間近で見られること、子どもと一緒に自分自身も成長できることではないでしょうか。責任は大きいですが、その分やりがいも大きいです。



【とれたて直送便】





「特別支援学級でよかった！」

先日、3年前に特別支援学級入級を決断するまで時間のかかった保護者と偶然会う機会がありました。私を見るなり、「子どもが毎日楽しく登校しています。今の学級に入れてよかったです。今の担任の先生にずっといてほしいです」と笑顔で近況を教えてくれました。

子どもは、自分らしくいられる環境（場所・人・活動）で変わります。